

法華經における根源的概念

西 康 友

はじめに

本稿は、法華經¹⁾ が成り立つおおもとの教説とは何かを明らかにしようとするものである。

法華經は、これまでの多くの先学によってなされた、多岐にわたる膨大な研究がある。それらは、法華經の思想はもとより、成立や写本に関するもの、さらに教学に至るまで、法華經から派生して独立した研究分野が確立するほど、広範囲にわたっている。

法華經成立研究では、SP 第 2 章 Upāyakaṣālya が最古の教説とする説が有力である²⁾。そこで、本論文では、これまでの研究と別の視点から、SP が歴史的段階を経て編纂されたという点を明らかにし、この教説が SP 最古であることを明示する。

また、上の仮説が成り立つとすれば、SP の根源的な概念や思想が、この教説上に見出されると考えられる。そこで、SP 第 2 章 Upāyakaṣālya の中で、SP 以前に編纂された経典に見出されない SP に特有な教説を検証する。

さらに、これまでの研究によって、『スッタ・ニパータ』第 884 偈³⁾ と SP 第 2 章 Upāyakaṣālya の 2 つの教説が類似しているという指摘がある。そこで本稿では、それは単なる類似性にとどまらず、SP 第 2 章 Upāyakaṣālya が『スッタ・ニパータ』の教説を再構成していることを検証する。この教説が部派仏教や、般若経系経典の教理的な影響が見出されないと考えられる⁴⁾ ことから、仏教最古の経典の 1 つとされる『スッタ・ニパータ』を取り上げ、これと SP 第 2 章 Upāyakaṣālya の 2 つの教説を検証してみたい。

多くの研究成果の中から、本稿のテキストとして、SP には『ケルン・南条校訂本』⁵⁾、漢訳法華經には、鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』⁶⁾ を用いる。本稿のテキストとして、この 2 つを選んだのは、以下の理由によるからである。

SP と『妙法蓮華經』を対照すると、鳩摩羅什が、龍樹からはじまる中観思想に傾倒していると考えられ、『妙法蓮華經』が、鳩摩羅什の深い仏教理解の上

に意識されている。そこで、本稿では、SP と『妙法蓮華經』の 2 つを中立的な立場から、互いに独立した経典と見なし、論を進めることとしたい。

法華經における最古の教説

最初期の初期大乘仏教経典は、AsP⁷⁾ の古層に求められるというのが、これまでの有力な説である。その AsP の古層は、西暦前後頃に、南インド地方において編纂された「般若経」の原型であると推定されている⁸⁾。

一方で、SP は、今は失われた都市であるガンダーラ（西北インド）地方で編纂され、現存する SP のような経典となったのは、西暦 150 年ころであるとするのが、最も有力な説である⁹⁾。

SP 成立過程の痕跡を示していると考えられる 5 つの用語、Saddharmapūṇḍarīka-（梵文法華經の経典の名称）、dharmaparyāya-「教説」「法門」、śūnya-「空」、śūnyatā-「空そのもの」「空性」、anupattikadharmakṣānti-「無性法忍」¹⁰⁾ に着目すると、SP は、歴史的段階を経て成立していることが考えられる¹¹⁾。このように、SP の成立過程を検証すると、SP 最古の教説が SP 第 2 章 Upāyakaṣālya にあると考えられるのである。

さらに一方で、SP 第 2 章 Upāyakaṣālya が、「梵天勧請」や「初転法輪」といった仏教最古と考えられる説話を保存しており、『スッタ・ニパータ』第 884 偈との類似が見られるという、これまでの研究¹²⁾ を再考すると、この教説が、仏教最古の経典の 1 つとされる『スッタ・ニパータ』の教説を、再構成し再解釈していることが考えられる。

また、SP 第 2 章 Upāyakaṣālya は、これまでの研究で示されているように、その内容から、部派仏教の教理や般若経系経典に現われるような空の概念が見出されないと考えられる。また、この AsP と SP は、互いに編纂地域も異なることから、無関係に編纂されたことが推定できるのである¹³⁾。

したがって、SP 第 2 章 Upāyakaṣālya は、初期大乘仏教経典最古の教説の 1 つであると考えられる。

このことが成り立つとすれば、SP 第 2 章 Upāyakaśalya に、SP 最古層を示す概念や、現存する SP 成立以前の仏教經典に見られない、独創的な SP の概念が見出されるはずである。このような視点で検証すると、SP 第 2 章 Upāyakaśalya 上で、「梵天勸請」の説話にほぼ一致している箇所や、「初転法輪」の説話を再解釈している教説を除いたものが、SP 最古層の教説であり、SP の独創的な概念を示していると考えられる。これこそが、SP の根源的概念に他ならない。その SP 第 2 章 Upāyakaśalya の教説とは、以下の教説である。

Saddharmapuṇḍarīka:

śraddadhata me śāriputra bhūtavādy aham asmi tathāvādy aham asmy ananyathāvādy aham asmi | durbodyaṃ śāriputra tathāgatasya saṃdhābhāṣyam | tat kasya hetoḥ | nānāniruktinirdeśābhilāpanirdeśanair mayā śāriputra vividhair upāyakaśalyaśatasahasrair dharmāḥ saṃprakāśitaḥ | atarko 'tarkāvācaras tathāgatavijñeyāḥ śāriputra saddharmaḥ | tat kasya hetoḥ | ekakṛtyena śāriputraikakaraṇīyena tathāgato 'rhan samyaksambuddho loka utpadyate mahākṛtyena mahākaraṇīyena | katamac ca śāriputra tathāgatasyaikakṛtyam ekakaraṇīyam mahākṛtyaṃ mahākaraṇīyaṃ yena kṛtyena tathāgato 'rhan samyaksambuddho loka utpadyate | yad idaṃ tathāgatajñānadarśanasamādāpanahetunimittaṃ sattvānāṃ tathāgato 'rhan samyaksambuddho loka utpadyate | tathāgatajñānadarśanasamdarśanahetunimittaṃ sattvānāṃ tathāgato 'rhan samyaksambuddho loka utpadyate | tathāgatajñānadarśanāvātāraṇahetunimittaṃ sattvānāṃ tathāgato 'rhan samyaksambuddho loka utpadyate | tathāgatajñānapratibodhanahetunimittaṃ sattvānāṃ tathāgato 'rhan samyaksambuddho loka utpadyate | tathāgatajñānadarśanamārgāvatāraṇahetunimittaṃ sattvānāṃ tathāgato 'rhan samyaksambuddho loka utpadyate | idaṃ tac chāriputra tathāgatasyaikakṛtyam ekakaraṇīyam mahākṛtyaṃ mahākaraṇīyam ekaprayojanaṃ loke prādurbhāvāya | iti hi śāriputra yat tathāgatasyaikakṛtyam ekakaraṇīyam mahākṛtyaṃ mahākaraṇīyaṃ tat tathāgataḥ karoti | tat kasya hetoḥ | tathāgatajñānadarśanasamādāpaka evāhaṃ śāriputra tathāgatajñānadarśanasamdarśaka evāhaṃ śāriputra tathāgatajñānadarśanāvātāraka evāhaṃ śāriputra tathāgatajñānadarśanapratibodhaka evāhaṃ śāriputra tathāgatajñānadarśanamārgāvatāraka evāhaṃ śāriputra | ekam evāhaṃ śāriputra yānam ārabhya sattvānāṃ dharmāṃ deśayāmi yad idaṃ buddhayānaṃ | na kiṃcic

chāriputra dvitīyaṃ vā tṛtīyaṃ vā yānaṃ saṃvidyate | sarvatraiśā śāriputra dharmatā daśadigloke | (SP 39.9-40.15)

『妙法蓮華經方便品第二』

舍利弗。汝等當信佛之所説言不虛妄。舍利弗。諸佛隨宜説法意趣難解。所以者何。我以無數方便種種因緣譬喩言辭演説諸法。是法非思量分別之所能解。唯有諸佛乃能知之。所以者何。諸佛世尊。唯以一大事因緣故出現於世。舍利弗。云何名諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世。諸佛世尊。欲令衆生開佛知見使得清淨故出現於世。欲示衆生佛之知見故出現於世。欲令衆生悟佛知見故出現於世。欲令衆生入佛知見道故出現於世。舍利弗。是爲諸佛以一大事因緣故出現於世佛告舍利弗。諸佛如來。但教化菩薩。諸有所作常爲一事。唯以佛之知見示悟衆生。舍利弗。如來但以一佛乘故爲衆生説法。無有餘乘若二若三。舍利弗。一切十方諸佛法亦如是。

(『大正藏』第 9 卷、p.07a17-b04。)

(試訳) シャーリプトラよ、あなたたちは、私を信じなさい。私だけが、真実を説く人であり、ありのままを説く人であり、偽りのないことを説く人である。シャーリプトラよ、如来の秘密の意味をもつことばは、認識することが難しいのである。それはなぜかと言えば、シャーリプトラよ、私の種々のことばの解釈、教説、言説、例証である、さまざまな百×千の巧みな方法によって、教えが説き示されたのである。シャーリプトラよ、正しい教えは、理性を超越し、理性を超越した領域にあって、如来が認識できるものである。それはなぜかと言えば、シャーリプトラよ、如来で、尊敬すべきで、正しくさとりを開いたものは、ただ 1 つのなすべきことのために、ただ 1 つのなされるべきことのために、大いなるなすべきことのために、世間に現われるのである。また、シャーリプトラよ、如来で、尊敬すべきで、正しくさとりを開いたものが、如来のただ 1 つのなすべきことのために、ただ 1 つのなされるべきことのために、大いなるなすべきことのために、大いなるなされるべきことのために、世間に現われるといった、なすべきこととは、何であるのか。すなわちそれは、如来で、尊敬すべきで、正しくさとりを開いたものが、生きとし生けるものたちに、如来の知見に駆り立て

るために、世間において現れる。如来で、尊敬すべきで、正しくさとりを開いたものが、生きとし生けるものたちに、如来の知見を示すために、世間において現れる。如来で、尊敬すべきで、正しくさとりを開いたものが、生きとし生けるものたちに、如来の知見に入らせるために、世間において現れる。如来で、尊敬すべきで、正しくさとりを開いたものが、生きとし生けるものたちに、如来の知見をさとらせるために、世間において現れる。如来で、尊敬すべきで、正しくさとりを開いたものが、生きとし生けるものたちに、如来の知見の道に入らせるために、世間において現れる。シャーリプトラよ、すなわちこれが、如来のただ1つのなすべきこと、ただ1つのなされるべきこと、大いなるなすべきこと、大いなるなされるべきことという、世間における1つの目的なのである。シャーリプトラよ、このようにして本当に、如来の1つのなすべきこと、1つのなされるべきこと、大いなるなすべきこと、大いなるなされるべきことをなすのである。それは、なぜであろうか。シャーリプトラよ、私だけが、如来の知見に駆り立てるのであり、シャーリプトラよ、私だけが、如来の知見を示すものであり、シャーリプトラよ、私だけが、如来の知見に入らせるのであり、シャーリプトラよ、私だけが、如来の知見をさとらせるのであり、シャーリプトラよ、私だけが、如来の知見の道に入らせるものである。シャーリプトラよ、私だけが、ただ1つの乗り物だけについて、生きとし生けるものたちに教えを説く。すなわちそれは、ブッダの乗り物である。シャーリプトラよ、決して、第2や、第3の乗り物は存在しない。シャーリプトラよ、あらゆる十方世界において、これが教えの本質である。

このSP第2章Upāyakaśalyaの教説が、SP最古の教説であり、SPの独創的な概念の1つであると考えられる¹⁴⁾。

この教説の最初の句、yad idaṃ tathāgatajñānadarśana-samādāpanahetunimittam sattvānāṃ tathāgato 'rhan samyaksambuddho loka utpadyate「すなわちそれは、如来で、尊敬すべきで、正しくさとりを開いたものが、生きとし生けるものたちに、如来の知見に駆り立てるために、世間において現れる」が、SPの根源的概念である。この句は、tathāgata-「如来」「そのようにや

って来た」という仏教以前の古代インド思想から知られている概念を、再解釈していると考えられる¹⁵⁾。また、釈尊がこの世間に生じた、ただ1つの目的は、如来である釈尊だけが、生きとし生けるものたちに tathāgatajñānadarśanasamādāpana-¹⁶⁾「如来の知見に駆り立てること」のためのものである。

また、このSPの最古層と考えられる散文には、tathāgatajñānadarśanasamādāpana-「如来の知見に駆り立てること」に続いて、tathāgatajñānadarśanasamdarśana-「如来の知見を示すこと」、tathāgatajñānadarśanāvātāraṇa-「如来の知見に入らせること」、tathāgatajñānadarśana-pratibodhana-「如来の知見をさとらせること」、tathāgatajñānadarśanamārgāvātāraṇa-「如来の知見の道に入らせること」こそが、ekam eva yānam「ただ1つの乗り物」であり、buddhayāna-「ブッダの乗り物」であると、示されているのである。

さらに、この散文に sarvatraiṣā śāriputra dharmatā daśadigloke「シャーリプトラよ、あらゆる十方世界において、これが教えの本質である」と明確に記述されていることから、SPの根源的概念は、その教えの本質である、tathāgatajñānadarśanasamādāpana-「如来の知見に駆り立てる」ことにあると考えられる。

一方で、以上のように、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』は、その当時までに存在していたさまざまな仏教経典や仏教経典論書を取り入れて、それらの深い仏教経典の理解に基づいて、西暦406年に鳩摩羅什たちが翻訳し、漢訳経典を編纂したものである。つまり、『妙法蓮華経』には、鳩摩羅什の法華経観が示されていると考えられるのである。中国や日本の法華経注釈者たちも、法華経のテキストを『妙法蓮華経』としていることから、『妙法蓮華経』を法華経の原典の1つと見なしてもよいと考えられるのである。

それゆえに、以上のことにより、法華経は、tathāgatajñānadarśanasamādāpana-「如来の知見に駆り立てること」を根源的概念とし、真のブッダ、つまり如来と同一である釈尊の境地に、生きとし生けるものたちを導くものは、何であれ upāyakaśalya-「巧みな方法[方便]」であると考えられる。

この世間は、現象世界であるから、つねにとどまるものは何一つない¹⁷⁾。それゆえに、法華経における根源的概念は、如来たちが生きとし生けるものたちすべてを、つねに tathāgatajñānadarśanasamādāpana-「如来の知見に駆り立てること」によって、唯一の buddhayāna-「ブッダの乗り物」に導き、生きとし生けるものたちすべて一人残らず、真のブッダである如

来になってもらいたいと、つねに願っているとする buddhayāna-「ブツダの乗り物」であると考えられる。SPの教説は、生きとし生けるものたちが、真のブツダを実現し、維持できるように、菩薩行をし続ける必要があることを示したものに他ならないと考えられるのである。

法華經の原典名は、Saddharmapuṇḍarīka である。初期大乘仏教經典のうちで、經典の名称そのものが、譬喩である仏教經典は他に見られないのではないかと思う。saddharma-を身につけた人こそ釈尊であり、saddharma-を身につけた人こそが、puṇḍarīka-のような理想的な人格者である。SPの經典名には、SPの upāyakaūśalya-「巧みな方法[方便]」である dr̥ṣṭānta-「譬え」「譬喩」が込められているのである。

最初期の仏教の説話とされる、「梵天勸請」や「初転法輪」の説話が、SP第2章 Upāyakaūśalya に保存されている。またこの教説は、部派仏教や般若経系經典の概念の影響が見られないとも考えられるのである。

したがって、SP編纂者たちは、釈尊が梵天に発したはじめての「ことば」そのものが upāyakaūśalya-「巧みな方法[方便]」であることに注目し、「梵天勸請」の説話に見られる「蓮華の譬え」、つまり、その中に見られる puṇḍarīka- そのものを、最重要視していると考えられるのである¹⁸⁾。

おわりに

本稿は、SPが歴史的段階を経て編纂され、その中でもSP第2章 Upāyakaūśalya に見られる、つねに tathāgatajñānadarśanasamādāpana-「如来の知見に駆り立てる」という upāyakaūśalya-「巧みな方法[方便]」がSP最古の概念であり、SPは、この概念から構成され発展したことを論じたものである。

この概念は、初期仏教經典や部派仏教經典、AsPの思想的影響が見出されないことや、AsPとSPの編纂地域も互いに異なることから、無関係に発展したと考えられる。それゆえに、最初期の大乗仏教經典は、この2つの原始AsPと原始SPの根本的概念から発展したものと考えられるのである。

したがって、初期大乘仏教經典の起源は、原始AsPと原始SPの根源的概念に求められ、AsPの思想の流れを受けて中観思想が、SPの思想の流れを受けて如来藏思想が、それぞれに発展したと推定できるのである。

この仮説を立証するためには、さらなる研究が必要であるが、ここでは、それを示唆することにとどめたい。

また、本稿では、SP以外の初期大乘經典の成立問題について、これまでの研究の中でも有力な説を支持したが、このことについても精査すべき点があり、さらにSPとほぼ同時期に編纂されたと考えられる、多くの初期大乘經典を取り扱っていない。

さらに、本稿のSPのテキストに『ケルン・南条校訂本』を用いたが、この校訂本は、これまでに多くの研究者から、SP写本におけるさまざまな伝承を考慮に入れずに、異なる地域の中期インド・アリアン語を混合して校訂したという問題が、古くから指摘されている。また、『妙法蓮華經』がどの梵文法華經を参照して、訳出・編纂されたのかが、いまだに不明なのである。

本稿では取り扱わなかった、竺法護『正法華經』の解明や法華經注釈書の検証、SPや『妙法蓮華經』がどのような人々によって保持され、どのような地域で流布し、どのようにして、生活の中で取り入れられたのかなど、明らかになっていないことが数多い。

このように、思想的研究をするとき、文献学的考察に基づく研究が必要不可欠であり、文献学的研究をする際にも、思想的研究に立脚してはじめて、多くのことが明らかになってくると考えている。

以上のさまざまな課題については、研鑽を重ね、今後の研究に期したい。

註

1) 一般的に「法華經」は、『妙法蓮華經』を指すが、「法華經」には、梵文法華經写本が30種類以上、漢訳法華經が「六訳三存三欠」とされ、『正法華經』十卷二十七品(西暦286年、竺法護訳)、『妙法蓮華經』八卷二十八品(西暦406年、鳩摩羅什訳)、『添品妙法蓮華經』七卷二十七品(西暦601年、闍那崛多・達摩笈多訳)、『薩芸芬陀利經』、『法華三昧經』、『三車誘引火宅經』が存在し、『薩芸芬陀利經』、『法華三昧經』、『三車誘引火宅經』の3つは現在、失われて、入手できない。

また、本稿でいう「法華經」は、それらの総称をいう。本稿のテキストとして、Saddhamapuṇḍarīka(編纂者が不明であり、西暦150年ころ、ガンダーラ地方で編纂されたと推定されている梵文法華經である。)のうち1つの校訂本と、『妙法蓮華經』(鳩摩羅什を中心とした翻訳者たちによる漢訳法華經で、西暦406年、中国の長安で編纂されたもの。)の2つを用いているが、論を進める上で注目すべき「法華經」について、梵文法華經を「SP」

- として、漢訳法華經を『妙法蓮華經』と明示し、区別した。
- 2) SP 第 2 章 Upāyakaṣālya 「方便品」が SP の中でも最古の教説とする代表的な研究に、(1) 横超慧日「法華經の仏身觀」(横超慧日編『法華思想』、平楽寺書店、1969 年、pp.406-423)。(2) 平川彰「大乘仏教の成立と法華經の關係」『初期仏教と法華思想』(平川彰著作集第 6 卷)、春秋社、1989 年、pp.485-518。(4) 荻谷定彦『法華經一仏乗の思想：インド初期大乘仏教研究』、東方出版、1983 年。近年、この研究を発展させた『法華經<仏滅後>の思想—法華經の解明(Ⅱ)一』、東方出版、2009 年が刊行された。(5) 松本史朗『『法華經』の思想—「方便品」と「譬喩品」一』『駒澤大学大学院仏教学研究會年報』第 28 号、1995 年、pp.1-27 などがある。最近になって、この論文をまとめた『法華思想』、大蔵出版、2010 年が刊行された。また、法華經成立研究の概要は、伊藤瑞叡『法華經成立論史—法華經成立の基礎研究一』、平楽寺書店、2007 年に 28 名の研究者の法華經成立説が首尾よくまとめられてある。
- 3) 『スッタ・ニパータ』第 884 偈 (=D. Andersen and H. Smith: *The Sutta-Nipāta*, Pali Text Society, Oxford University, 1913, p.172.) ;
 “Ekaṃ hi saccaṃ na dutṭiyam atthi, yasmiṃ paṇā no vivade paṇānaṃ, nānā te saccaṇi sayamaṃ thunanti, tasmā na ekaṃ samaṇā vadanti,”
 (試訳) 真理は 1 つであって、第 2 のものは存在しない。それを知る人は、知りつつ争うであろうか。彼らはさまざまに、もろもろの真理を自ら主張する。それゆえに、彼らは、1 つの真理を語らないのである。
- 4) 部派仏教の教理と法華經が無関係であることを論じたものに、水野弘元「部派仏教と法華經の交渉」(坂本幸男編『法華經の思想と文化』、平楽寺書店、1965 年、pp.67-96) や藤田宏達「一乗と三乗」(横超慧日『法華思想』、前掲書、pp.352-405) がある。また AsP と SP が当初、お互いの教説が無関係であるとするのは、辛島静志「法華經における乗 (yāna) と智慧 (jñāna) —大乘仏教における yāna の起源について—」(田賀龍彦編『法華經の受容と展開』、平楽寺書店、1993 年、pp.137-197) などに論じられている。
- 5) 本稿では、SP 写本や SP 校訂本の中から、H. Kern, and B. Nanjio: *Saddharmapuṇḍarīka*, Bibliotheca Buddhica X, St. Pétersbourg 1908-12 をテキストとする。この『ケルン・南条校訂本』は発刊当初から、異なる伝承の SP 写本を混合して編纂したことが指摘されているが、このことは言語学上や正書法の問題であって、SP の内容が大幅に異なるものではないので、SP のテキストとして用いることにした。
- 6) 『大正新脩大蔵經』第 9 卷、pp.1-62。以下『大正新脩大蔵經』を『大正蔵』という。
- 7) P.L.Vaidya, ed.: *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Buddhist Sanskrit Texts No.4, Darbhanga, 1960 をいう。以下では、この *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitā* を「AsP」という。
- 8) 梶山雄一「解題」、『八千頌般若經 I』(大乘仏典 2)、中央公論社、1974 年 (初版)、2001 年 (文庫版)、pp.348-358。梶山雄一「『般若經』の出現」、『般若經 空の世界』(中公新書 422)、中央公論社、1976 年、pp.76-110。
- 9) 岩本裕「解題 『法華經』のサンスクリット語原典」、坂本幸男・岩本裕訳注『法華經 (中)』、前掲書、pp.429-438。
 望月良晃「法華經の成立史」(平川彰・高崎直道・梶山雄一編『講座・大乘仏教 法華思想』、春秋社、1983 年、pp.48-78)。
 また、安田治樹「ガンダーラ仏と蓮華座」『大乘仏教美術展開の研究』、博士学位論文 (立正大学)、2008 年、pp.51-67 によると、「蓮華座に関する考究では、インドにおける蓮華の象徴性をたどるとともに、仏座への蓮華の適用がガンダーラが初出であることあらためて確認し、それが蓮華に具わる『超越性』という象徴に大乘が憑依した結果に他ならないこと等を論じ、蓮華座を所坐とする仏陀は地上的觀念の世界を超えた『出世間』的存在、すなわち大乘の理想仏であり、結果としてこの美術における蓮華乃至乃至蓮華座の登場が自ず大乘の標幟たり得ることを主張した」とあることから、SP の原型はガンダーラ地方で編纂された確証が高い。
- 10) この *anupattikadharmakṣānti*- の用語は、「(何も) 生ずることのないという真理」を意味し、AsP における空 *śūnya*、*śūnyatā*- を表現している独特な用語である。つまり、この *anupattikadharmakṣānti*- は、AsP において空の概念を発展させた表現であり、同義語と見なすことができる。(武田浩学「無生法忍——『大智度論』の空思想における基本概念——」『大智

- 度論の研究』、山喜房佛書林、2005年、pp.37-88。)
- 11) この概要は、拙稿「梵文法華經における空の用例」、宗教研究 81 (4)、2008年、pp.1070-1071を参照されたい。その中で、SP全体では、はっきりと原始仏教における空の概念、AsPにおける空の概念に区分されており、1つのSPの章で、原始仏教における空の概念とAsPにおける空の概念とが混合して使用されている用例は見出されないことがわかる。
 - 12) 梵天勸請の説話とSPとの関係を論じたものに、下田正弘『「梵天勸請」説話と『法華經』のブツダ観一仏教における真理の歴史性と超歴史性一』、『中央学術研究所紀要』第28号、1999年、pp.69-99などがある。また、初転法輪の説話とSPとの関係は、真野龍海「法華經『方便品』と『初転法輪』」、大正大学研究紀要佛教學部・文學部第77号、大正大学出版部、1992年、pp.1-32を参照されたい。
 - 13) 辛島静志「法華經における乘(yāna)と智慧(jñāna)一大乗仏教におけるyānaの起源について一」、前掲論文に同様な記述があり、SP第1-9章を法華經の第一期の成立と述べている。SP第1-9章とAsPとは無関係であるとしているが、SP第3章āupamyāには、mahāyāna-の用語が見出されることから、SP第3章āupamyāがAsPと無関係に編纂されたとは考えにくい。このことはさらなる検証が必要である。
 - 14) 藤田公達「一乗と三乗」(横超慧日編『法華思想』、前掲書、1969年、pp.361。)は、「(中略)一乗への直接の言及という点からみれば、『法華經』では、「方便品」以下の八章を除くと、極めて少ないのである。たとえば、羅什訳によると、「一乗」の語はこれらの章以外としては第十二品(提婆達多品)の偈頌と第二十一品(如来神力品)の偈頌に、それぞれ一回ずつ用いられているが、サンスクリット本には全く認められない。もっともサンスクリット本では、一乗に相当する「仏乘」(buddhayāna)は、第一章の詩句の中に現われるが、このような例は他にはほとんど認められない。したがって、『法華經』における一乗の教説は、上記の八章において説かれるのが、そのすべてであるといっても過言ではないであろう。しかもこの八章においても、第三章以下は、第二章を基点として説かれているものと見れば、『法華經』における一乗の主張は、結局、第二章「方便品」においてすでに尽きている、と言ってもよいのである。」と、論じている。
 - また、松本史朗『「法華經」の思想一「方便品」と「譬喩品」一』、『駒澤大学大学院仏教学研究會年報』第28号、1995年、pp.1-27においても、法華經の最古の教説は、法華經方便品の散文にあると述べている。
 - 15) 水野弘元「tathāgata(如来)の意義用法」『印度學佛教學研究』第5巻第1号、1957年、pp.41-50。
 - 16) SP 40.3; samādāpana-[samādāpaka-]は、F. Edgerton: Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, Motilal Banarsidass Publishers, Delhi, 1953, pp.567-568によると、instigation (of others) to assume, take on themselves [one who incites (another) to assume, take himself, one who inspires (another)] とあることから、「一に駆り立てる」、「一を起こさせる」、「一を奨励する」、「一に誘引する」の意味である。また、『妙法蓮華經』では、「欲令(衆生)開佛知見」(『大正新脩大藏經』第9巻、p.7a25。)に対応する。なお、K. Tsukamoto, R. Taga, R. Mitomo, S. Kawazoe and M. Yamazaki: *Sanskrit Manuscripts of Saddharmapundarīka, Collected from Nepal, Kashmir and Central Asia. Romanized Text and Index, Vol. II*, The Society for the Study of Saddharmapundarīka Manuscripts Tokyo, 1988, p.157 (塚本啓祥・田賀龍彦・三友量順・川添良幸・山崎守一共著『梵文法華經写本集成 ローマ字本・索引』、梵文法華經刊行会)、によると、この箇所はすべて samādāpana-[samādāpaka-]である。
 - 17) 釈尊の入滅直前の最期の説法に、諸行無常が説かれた説話があるが、SPの教説も仏教經典である以上、この真理を打ち破るものではない。
 - 18) 安田治樹「ガンダーラ仏と蓮華座」、前掲論文によると、西暦前後のガンダーラ地方で蓮華を中心とする信仰があったことが推定される。また、仏像の起源が南インドのマトゥーラ地方と西北インドのガンダーラ地方の2つの地域とすると一般的に考えられていることから、初期大乘仏教經典の源泉を最初期のAsPと最初期のSPとする仮説が推測される。また、ガンダーラ地方で発掘された仏像の中で、西暦前後と推定される仏像が蓮華座に乗っていないのに対し、それ以降の仏像が蓮

華座に乗っているという違いも興味深いが、これらのことは、さらなる研究が必要である。